

# (研究ノート) 観光と哲学 —問題群整理と課題抽出—

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 原 一樹

## 【目次】

- 0 はじめに
- 1 観光研究と哲学諸理論
- 2 観光現象の文脈における根本諸概念
- 3 結論に代えて

## 0 はじめに

観光研究に哲学はいかに寄与しうるか、また、逆に観光研究は哲学にいかにか寄与しうるか、この課題を探究することが筆者の中長期的目標の一つである。言い換えれば、観光研究と哲学研究との狭間から、新たな研究領域を開拓することを目指す。然るに現在のところ、筆者にとって拓くべき領域は未だ霧に覆われ、臆気に問題の気配が感じられる状況に留まっている。本稿は第一歩として、関連先行研究の読解から浮上する諸課題を整理し、問題の位置する方向や問題の大きさを少しでも見通せるようにする準備作業を行う。

## 1 観光研究と哲学諸理論

### 1.1 ドゥルーズ&ガタリによる「ノマド論」と「モビリティ」研究

Urry(2007)<sup>1</sup>や D'Andrea(2006)<sup>2</sup>、大橋 (2010)<sup>3</sup>を参照し「モビリティ」概念を巡る議論状況について瞥見したが、これら諸文献の中で様々な論点が挙げられている。注目すべき論点や問題としては、ドゥルーズ&ガタリ哲学に由来すると思しき「定住者主義」と「ノマド主義」という二項対立的着想、「モビリティ概念」の含む諸相、文化と「モビリティ」の繋がり的问题(「旅する文化」という問題系)、モビリティ能力と社会的不平等の問題(移動を強いられる人々・自由に移動する人々・移動できない人々)、「移動のフェティシズム」(アーリ)等が挙げられるだろう。

必要な作業の第一は、まずは更に網羅的に「モビリティ」概念に関する先行研究を消化吸収することだが、その際に D'Andrea (2006) の提出する「ネオノマド」概念の評価を行うこと、「ネットワーク資本」や「社会関係資本」概念とモビリティ概念との関係性を見通すことも必要である。他方、改めてドゥルーズ&ガタリが(P.ヴィリリオらの議論を踏まえつつ展開した「移動」や「速度」に関する言説を再検討し、彼らの政治的問題関心であった「マイナー生成」や「監視社会」という主題と観光研究(モビリティ研究)の文脈とを接合する作業も遂行されるべきであろう。

### 1.2 フーコー理論と「観光の眼差し」論

この問題系については、J.アーリ本人の著作以外にも多くの論文が執筆・蓄積されてきており、Robinson& Picard (2009)<sup>4</sup>、Chris Ryan (2010)<sup>5</sup>、Hollinshead(1999)<sup>6</sup>、Cheong& Miller(2000)<sup>7</sup>、などを参照した。

大きな問題としてはそもそもアーリ以降の「眼差し」論はどのような意味でフーコー理論を継承・応用していると言えるのか、また、フーコー理論のその他の概念や着想はいかに観光研究の文脈に応用できるのか、という問いが立てられうるだろう。或いは「生権力」・「生政治」といった観点と観光現象は繋がりうるのかと問うてみる必要もある。

具体的作業としては再度、アーリによるフーコー活用の実態を検討し直すと同時に、フーコー自身の言説による裏付け作業が必要である。また同時に視野を広げ、例えば戦後フランス思想の潮流における「眼差し」概念の意味を歴史的に再検討すること<sup>8</sup>、「観光における権力関係論」全般の問題系を整理検討する作業も必要となるだろう。

### 1.3 現象学や解釈学の活用

Pernecky& Jamal(2010)<sup>9</sup>によれば、他分野への現象学・解釈学の応用に比べ、観光研究への応用は立ち遅れている段階であると言う。但し、観光現象が独特の「観光経験」を伴うものであること、観光対象の「解釈や記述」を不可欠の要素として含むことを鑑みるだけでも、観光研究の文脈への現象学・解釈学の応用可能性は十分に見込みがある方向性が見積もられるべきである。具体的には古典的論文の一つである Cohen(1979)<sup>10</sup>を端緒としつつ、現時点で蓄積されている先行研究を踏まえた上で<sup>11</sup>、観光経験の現象学的記述や、遺産・観光地を巡る解釈・解釈者といった問題系の探究へと進む必要があるだろう。

### 1.4 モダニティ／ポストモダン論の文脈

それ自身様々な理解が錯綜している「モダニティ」や「ポストモダン」・「ポストモダニズム」という概念や時代把握と観光研究とは、更にそこに「ハイパーリアリティ」・「シミュラクル」・「スペクタクル」等の哲学思想系の議論で使用されてきた概念や、「ポストツーリスト」・「フィルムツーリズム」などの観光に関する新たな観点や形態が絡みあうことで、複雑な問題系を形成している。<sup>12</sup>

まず大きな問題としては、一つの社会状況認識としてしばしば提出される、「ツーリストと非ツーリスト、ツーリズム行動と日常行動との区別の溶解」という着想や、「労働に代わり余暇が各個人のアイデンティティ形成の主軸となる」という認識の根拠や効果を再検討する必要があるだろう。同時にそれは資本主義体制の大きな変化（フォーディズムからポストフォーディズムへ）と対応する（観光行動もそこに含まれる）個人生活の変化に目配りした上で、いかに時代の特徴を押さえるかという問題を再検討することにもなるだろう。（様々に提出される「〇〇社会」という社会把握<sup>13</sup>が収斂する地点があるのか、或いはそれらの様々な社会把握をいかに調停・調整するべきかという

問題だとも表現できよう。）

具体的作業としてはまず、「ポストモダニズム」関連の基礎的諸概念が提出された諸言説を当時の文脈に遡行しつつ再検討し<sup>14</sup>、現在の観光文脈（ポストツーリスト論、フィルムツーリズム経験）の中でそれらがどう位置づけられるか、どのような概念としてどのような意味で使用することが有効かを検討することが必要である。この際、真正性という概念をどれほど観光研究の文脈で重視するかという問題が別にあるが、「世俗化された消費社会における聖性≒真正性の探究」という観点や、「実存的真正性」という概念との関係性において、議論を展開することになるだろう。

### 1.5 観光研究の「批判的転回」

国内・国外の幾つかの研究を瞥見するに、観光学研究の「批判的転回（Critical turn）」がしばしば要請されてきている。例えば大橋（2010）は、観光における「より良い安全」・「より高い持続可能性」・「より良い平等性」を検討するには実証主義では不十分で、批判主義的研究が必要だとする。また、McLaren&Jaramillo（2012）は総論的に「ツーリズムをグローバル資本主義の最底辺の者の立場から再考する」ことや「サバルタンやプロレタリアートとの連帯の必要性」を主張している<sup>15</sup>。更に、著名な観光学者 Tribe は「職業教育としての観光教育をより広いリベラルなイデオロギー領域へと拡張する」ことを提案しているとされる<sup>16</sup>。このような潮流の発生は、観光研究や観光教育のそもそもの目的に関する反省が生じてきているとも言え、哲学研究者としても大変興味深い。

具体的作業課題としてはまず、いわゆる「倫理的ツーリズム」を巡る議論も念頭に置きつつ、「観光への自由」や「観光における平等・不平等」といった観点からの先行研究を再検討する必要がある。この際注意すべきは、いかなる意味で「哲学・倫理学理論」が個別具体的案件に介入し貢献できているかを見定めることだろう。個別具体的状況

における「平等・不平等」や「善き振る舞い」に関する問題に対し、いわば「天下りの」に哲学・倫理学理論を適用するのは適切ではないはずである（寧ろ不可能ですらあるのではないか）。そこでそもそも哲学・倫理学理論が個別の問題状況にいかなる形でコミットできるのかを先行研究をサーベイしつつ考える必要があるだろう。また、「グローバルツーリズム」という大局的見地から主張される「サバルタンやプロレタリアートとの連帯」という論点については、まずは日本社会内における「サバルタン」や「プロレタリアート」とは誰なのか、どこにいるのかを問うという根本的作業から始める必要もあるのではないか。更に「観光教育が持つイデオロギー性の批判」については、「職業教育としての観光教育が持つイデオロギー性とは何か」という問いを立てた上で、産業上の必要性からも国外・国内において増加しつつある観光教育研究機関において「リベラル」であるとはどういうことか、具体的カリキュラムをどう構想すべきかという、極めて実践的な問いをも探究する必要があるだろう。

## 1.6 その他の西欧哲学者・思想家の理論

およそ哲学者や思想家が人間存在に深く関わるあらゆる事象について根本的な議論を展開する存在である限りにおいて、これまで観光研究の文脈に適用・応用されてこなかった哲学者や思想家の諸理論の更なる活用も構想される必要があるだろう。各哲学者や思想家のどの概念や着想をうまく観光研究に活用するかは今後具体的・個別的に探っていく必要があるが、ここで幾つか方向性を示唆しておきたい。

観光学の古典であるマッカネルの『ザ・ツーリスト』が多くの西欧哲学・社会学の議論を参照しつつ組み立てられている点は周知であるが、今なおマッカネルの根本的アイデアの一つである「マーカー」や「ツーリスト・サイト」については、その理解や意義を巡って議論の応酬がある<sup>17</sup>。こ

れらの問題系については、訓詁学・注釈学に陥る必要は無いとしても、観光経験の本質を理解する為に有用な限りにおいて、マッカネルが参照したソシュールの記号論や、或いはパースの記号論へも適切に遡行しつつ、理解を深める必要があるだろう。或いは同様の作業は、アールの「眼差し論」や「モビリティ論」についても進められねばならないはずである。

Rickly-Boyd (2012) は、「真正性とオーラ」という概念に焦点を合わせ、観光研究と哲学者・批評家ベンヤミンの言説との接続を試みている<sup>18</sup>。ベンヤミンの言説を丁寧に時系列にも目配りしつつ理解し、それを「都市・風景・人々のオーラ」というベンヤミン自身が明瞭に展開し尽くしたとは言い難いテーマと突き合わせ、観光研究とベンヤミン研究の双方にとって興味深い議論を展開している。このように、観光研究が逆に個別の哲学者や思想家の理論の更なる洗練にも貢献できることを示す事例が陸続と登場するならば、観光研究と哲学研究との出会いは、更に幸福なものとなるだろう。

この観点から見た場合には、特にフランス現代哲学思想という領域に限っても、「幸福な出会い」が演出できそうな主題は少なくない。例えば J. デリダなどの現象学が提出する「歓待」概念、R. バルトの「神話作用」（日本という文脈に拘るならば「表徴の帝国」も忘れられない）、P. リクールらに代表される「物語」や「記憶」を巡る言説などは、観光研究との接続に大いに期待が持てる主題群ではないだろうか。かつて哲学者ドゥルーズが言ったように「哲学者を別の舞台で踊らせること」が、後に生まれた者の務めであるならば、一步ずつでもこの歩を進めねばなるまい。

## 2 観光現象の文脈における根本諸概念

本節では少し視点を変え、人間に関する根本的諸概念が観光現象の文脈においていかなる形で問題とされうるかについて、課題を抽出してみよう。

## 2.1 自己・アイデンティティ・主体性

自己・アイデンティティ・主体性といった事柄については観光研究の文脈でも様々に語られている。「旅行を通じた同一性形成」の指摘、「余暇がアイデンティティ形成にとって重要となった社会」の指摘、「関与理論」（休日の営みがその人間の人生の関心事の追求となっている事態を指摘する説）の提案などが挙げられるだろう<sup>19</sup>。他方、観光という文脈を離れても、様々な形で「自己」や「アイデンティティ」を捉えようとする言説や主張は数多存在している。現代のネットワーク社会において個人のアイデンティティが「複数の脱中心的なもの」となったという議論や、人間のアイデンティティは所与ではなく「仕事」となったという議論（バウマン）などがある。

これらの錯綜する議論状況の中で、事柄の本質を見通す為には、歴史的・大局的・個別具体的視点を組み合わせつつアプローチする必要があるかと思われる。

まず必要なのは、そもそも「旅行を通じて同一性が形成される」とはどのような事態かという問いの探究である。これについては歴史的に長いスパンを取り、巡礼者や思想家・科学者・作家・芸術家などの旅の記録や紀行文を読解検討しつつ、「旅行を通じた自己形成」という現象の内実が示す事柄を充実させていくのが魅力的作業ではないかと考えられる。

次に大局的かつ概念的議論として、「現代社会におけるアイデンティティ形成」の問題全般に取り組む必要があるだろう。そもそもアイデンティティ形成にとって「物語ること」や「他者」の存在がどのような意味を持つのかといった原理的問いに加え、メディア環境や労働・余暇環境の変化が人間のアイデンティティ形成にいかなる変化を及ぼしてきたか・及ぼしているかを経験的諸科学の知見を参考にしつつ押さえる必要がある。

これらの歴史的・大局的・概念的議論の上で、昨今の観光現象の文脈を視野に入れた議論を展開

することが必要である。この手順を踏むことで、観光地創造におけるツーリストの主体的関与の増大や、旅行ブログの隆盛などの新たな現象についても、事実の表層的理解を越えた本質的な理解への到達が期待されるはずである。（実際には、歴史的・大局的・概念的議論の探究と、同時進行で為される個別具体的事象の調査研究が会う地点で、本質的議論が生産されるに至るという順序となるだろう。）

## 2.2 他者

観光には他者性を構築し商品化する働きがある。或る特定の集団の文化がその集団特有のものとして固定され、時には或る集団の「後進性」こそが、観光資源となってしまいう事態もある<sup>20</sup>。或いは様々な観光メディア（パンフレットや写真・映画等）は特定の集団や場所に関するイメージを形成し、我々を「他者イメージの消費」へと誘う<sup>21</sup>。この事実が確かにあるとして、我々はどのような態度を取るべきだろうか。或いは、どのような問題を切実なものとして立てるべきだろうか。

必要な作業として、オリエンタリズムやポスト植民地主義に関する批判理論を消化吸收し、「他者表象を産み出す権力関係」に関する理論的理解を深めると同時に、日本という歴史的社会的文脈において、これらの理論を活用した批判を展開することが当然挙げられるだろう。

但し他方で、何故そもそも「他者性の構築と商品化」が批判されねばならないか（特に一見したところ全関与者に不満足が無い場合が問題ともなる）という問題については、一義的解答や原理原則が明らかであるようには思えない。言い換えれば、他者性は誰の為に、何の為に守られねばならないのだろうか。「他者性の構築と商品化」の批判の根拠はどこにあるのか。「<非日常の日常化>のループの中にある産業化された観光」から観光の「非日常性・他者性」を守るための運動として、須藤（2008）はエコツーリズムやバックパッカー

ツーリズム、ホームステイ民間団体等の運動を挙げている<sup>22</sup>。確かにこれは実践的視点からは説得力を持つ回答であろう。しかしやはり、どの他者性を、誰が、何の為に、どのようにして守らなければならないのかという原理的な問いに対する概念的レベルでの回答ではない。凡そこの「哲学的、あまりに哲学的な」問いが不毛性を孕むものではないかとの懸念もあるが、個別具体的事例の検討においても、「批判の根拠」の問いには拘り続ける必要があるのではないだろうか<sup>23</sup>。

ここまでの議論とは対極的に、観光が他者との同一性や親密性、共同性を創り出す装置としても機能する側面を忘れてはならない。例えば Hom-Cary (2004) は目的地において「差異の感情」が「同一性」感情へ変わる、社会的親密さの瞬間を「ツーリストの瞬間」と称しており、社会学者パウマンも「ホストとゲストがそれぞれの文化的境界を超える可能性」を示唆している<sup>24</sup>。旅や観光が「水平的・平等的」な集団形成に寄与する点はこれまでも指摘されてきたが、旅や観光が「自己と他者」との関係性に対し与える積極的に評価される点についても、具体的事例を踏まえつつ概念的にもその内実と可能性を検討していく必要があるだろう。

## 2.3 空間性

空間性、とりわけ観光が関与する空間について原理的レベルで思考するには、地理学がここ数十年で積み上げてきた成果や、メディアの進歩がリアル空間・ヴァーチャル空間に対し与えつつある変容を歴史的・理論的・経験的に踏まえた上で、そこに（筆者が長きにわたり個別研究対象としてきた故でもあるが）ドゥルーズ&ガタリ哲学の空間論を突き合わせてみて、何か新たな知見や可能性が見出されるかを試してみることが可能である。

特に地理学における空間認識の変遷については、神田 (2001) が非常に参考になる<sup>25</sup>。世界的に著名な地理学者ハーヴェイによる「資本主義の空間

性」に関する認識や、ルフェーブルによる「3つの空間」生産の認識を組み合わせることで、現代資本主義社会の空間性を理解する大きな枠組みが与えられ、更に神田 (2001) はストリプラス&ホワイトやセルトーの議論へと参照しつつ、「観光空間」を「合理的支配を行いつつオルタナティブの可能性を開く矛盾の空間」と位置づける<sup>26</sup>。そこには「他者との出会いによる想像／創造の可能性」があると言う。

以上の認識に加え考慮すべきは、Mansson (2011) が言うように、近年のメディアの進歩により観光者（ツーリスト）自身がメディア生産物の生産者となりつつあり、観光空間・観光地の生産において強い影響力を持ち始めているという点である<sup>27</sup>。メディアの進歩により、観光空間を生産し消費する主体間の力関係が変化しつつある。

地理学の空間認識やメディアの進歩を受けて、では、何が考えられるべきであろうか。

まずは、「矛盾の空間」としての「観光の空間」が開く「オルタナティブの可能性」についてだが、それが何を原因として、どのような形で、どのような意味で生み出されるのかが問われねばなるまい。「身体的実践」や「他者との出会い」が何故「オルタナティブ」を開くのか、生み出されると言われる「差異」とはどのようなものか、そもそもここで言われている「オルタナティブ」や「抵抗」とはどのような意味を持つものなのか、これらの問いへの答えが必要である。リアル空間とヴァーチャル空間の相違や2つの空間の交錯も視野に入れつつ、これらの問いはメディアの進歩という現状をも踏まえつつ、考えられる必要があるだろう。

加えて、ドゥルーズ&ガタリ哲学との関連から見ると、ドゥルーズ&ガタリの空間論（領土論）は観光空間を「より良き空間」にする為のヒントや知見、指針を与えうるか、と問うことが可能である。聊かジャーゴンを使うならば、「観光空間と戦争機械＝生成変化」、「観光空間と領土化・脱領土化・再領土化」という主題の探究が必要である。

## 2.4 政治性

観光の政治性の問題は、上述の「観光研究の批判的転回」や「他者性の構築と商品化」といった主題とも深く関係しているものである。

まずは前提となる作業として、観光地開発における政治的対立の重要な事例と、そこで発生した政治闘争の経緯・帰結を広く学び、同時に「倫理的ツーリズム」を巡る擁護論・反対論の現状を知ることが必要であろう。

上記作業と同時に考えるべきは、観光地開発に関する政治的対立に関し、哲学研究者或いは観光研究者としていかなる形で介入することがそもそも可能なのかという問題だろう。Jamal&Menzel(2010)が言うように、「ツーリズムにおける良い行動」として「資源保存、ゲストにとっての良い経験、関連するコスト・ベネフィットの適正な配分、被雇用者の責任ある取扱い、地域の文化的遺産への注意」といった明確な指針が既に存在し<sup>28</sup>、更に利害関係者の間で合意が形成されうる（或いは合意形成への可能性が開かれている）ならば、実践的に解決可能な問題に殊に理論研究者の出る幕は無いのではないかとの疑念も湧く。勿論「理論的知を備えた実践者」としての参画が可能であり、現実にも多くの参画が為されているはずだが、常に研究者自身は自らの参画が周囲に及ぼしてしまう意味や効果、自分の意識的・無意識的な価値判断に自省的であらざるをえないとは言えるだろう。

## 2.5 想像力

想像力という主題は、多くの論者の論考の中に様々な角度から登場するものである。大橋(2010)の適切な整理紹介の中には観光地イメージの形成のされ方やそれと観光客満足との関係性を扱う経験的諸理論が示されているし、須藤(2008)が例示する議論によれば、ディズニーランドは「人々の想像力が閉じ込められる」・「マクドナルド化された観光施設」の典型だと言われる。或いは

Ryan(2010)は、ターナーの古典的な「リミナリティ」論が、ツーリズムに結び付けられる「幻想的分析」に活用されると言う。特に想像力に焦点を絞った興味深い論考としては Salazar (2012) があるが<sup>29</sup>、その中でツーリズムは「イメージ生産産業」と称され、「イメージや言説の形を取った想像的なもの」がいかに「ツーリズム回路」の中を流通するかに関する分析の少なさが指摘される。また、「ツーリズムにおける想像性」は「同一性形成・場所創造・文化の絶えざる発明の過程における本質的契機」であり、「新たなイメージや言説」の創造についてツーリズム研究者・教育者が大きな責任を持つことが指摘されると同時に、「ツーリズム的想像性」の議論は研究者と実務家との間に建設的議論を開くことに貢献するとも言われる。

「想像力・観光・哲学」を繋ぐ作業としては、まずは「想像力」に関する様々な哲学者の言説の論点をまとめつつ、観光現象（或いは消費の現場）における「想像力」の在り方や働き方を考察してみる作業が必要であろう。或いは精神分析の文脈で語られる我々を構成する「幻想」という主題と、観光文脈で言われる「幻想」がどう繋がりうるかを検討する作業も可能である。

より原理的な問いとしては、「不可視のものとしての想像的なもの」がいかに「具体的な形象」へと具現化されるかという問い、両者の形成する円環の作動形態への問いが立てられうるだろう。この問いは Salazar (2012) の言う具現化形態の流通に関する経験的分析という作業と補完し合うものとなるはずである。

また、政治的・批判的な問いとしては、想像力が持つ政治的な力、想像力を封じ込める様々な装置やそれへの抵抗戦略、或いは想像力の自発的放棄(?)といった方向からの問いを、観光文脈に即して立てうるのではないだろうか。「想像的なもの」はツーリズムがその中で作動する最大の概念的枠組み(「メタナラティブ」)だという理解もあるように、想像力に関する問いは観光研究のあら

ゆる場面に関係する問いだとも言えるだろう。

## 2.6 身体性

観光を単に経済的な商品の生産・流通・消費システムとして見るのではなく、多くの人間による意味や文脈理解、身体的実践を巻き込んだ複雑な意味論的プロセスでもあると見る時、観光における身体的実践やパフォーマンスを軸に据えた研究が前景に現れてくると言えるのかもしれない。Crouch(2004)<sup>30</sup>は、哲学者メルロ・ポンティらに由来する、身体的実践を重視する「非表象理論」を理論的背景として挙げつつ観光や観光研究における身体的実践やパフォーマンスの重要性を指摘している。曰く、観光者は単なる観光商品の消費者ではなく、身体を用いた各種の動き（写真撮影・ダンス等）により「ツーリズムを実践する」者であり、そのパフォーマンスは表現的・制作的・間主観的なものと捉えられる必要がある。また、この身体的実践により、観光者自身のアイデンティティ形成や「生成」（自己の深い再配置）が生じたり、観光目的地やイベント、ホスト・ゲスト関係の意味や機能も書き換えられたりするとされる。

哲学研究者としてはまず、上述の観点に基づく研究が現象学やドゥルーズ哲学に影響を受けていることを再確認し<sup>31</sup>、具体的にどのような論脈で哲学理論が活用されてきたかを再検討する作業から始めねばなるまい。また、「身体性」を議論する文脈が上述の「自己」や「観光空間」という主題とも強く関連してくる点にも注目する必要がある。観光における身体的実践が各人のアイデンティティの再形成や自己変革にいかに関与するかという問題や、「観光空間」における「オルタナティブ」や「抵抗」と称される事柄とどう関係するかという問題について、先行研究理解を深めつつ、自らの手で個別具体的な事例の収集と検討も行い、概念的・理論的にその内実を詰めていく作業が必要だろう<sup>32</sup>。

## 2.7 物語

旅や観光と「物語」との関係性は、昨今、日本語圏の観光研究で取り上げられることの多い「コンテンツツーリズム」という「地域の物語資源を活用した観光形態」に関する文脈で考察される場合や、観光者が旅行経験を物語ることの意味を考察する論考で取り上げられることが多い。Gretzel他（2011）によれば、旅行経験を物語ることはツーリストが自らの経験を組織化し、それに意味を付与できるようになるという意味で、強力な「反省ツール」であると位置づけられ、個人や社会のアイデンティティ形成において重要な役割を果たすものとされる<sup>33</sup>。「旅行を物語ること」は特にランドツアー以降盛んになり、写真や絵葉書などのビジュアルメディアがそこで果たした大きな役割にも注目する必要があると言われるが、特に近年のネット環境の進歩に伴う「トラベルブログ」の隆盛などを鑑みるに、まさに現代的状況において「旅行経験を物語ること」が個人や社会に対し与える意味は何かを検討することは興味深い主題であると言えるだろう。

まず概念的レベルで再考されるべきは、そもそも「物語ること」と「アイデンティティ形成」との関係はどのようなものかという問題、また、先の身体性の話とも繋がるが、そこに身体的実践はどう関わるかという問題であろう。これについては「物語」の持つ存在論的機能に関する哲学的言説を渉猟し上手く活用する必要がある。加えて、観光経験に関する物語の特殊性や特徴はどこにあるかという問題も浮上するし、それが「社会のアイデンティティ」形成するとはいかなることか、に関する議論も突き詰めて考える必要があろう。

## 2.8 文化

文化概念については、特に文化観光の持つ政治性を巡る問題系が興味深い。国家観光戦略の下、特定の文化が特定の国家に繋ぎ止められてしまう問題や、「国民文化」の商品化の問題、文化の所有

権の問題などの存在が指摘されている。また、「旅する文化」と「場所に根差した文化」の双方に依拠する「観光という現場」の矛盾した状況が指摘される場合もある<sup>34</sup>。何を以て政治的問題とみなすかという問いは措くとして、いわゆるポピュラーカルチャーが観光対象となる現象の意味や、ポピュラーカルチャーが生み出す新たな「観光の眼差し」を分析する必要性を指摘する論考もある<sup>35</sup>。

これらの問題系に関し何らかの形でコミットするには、まずは各論点や主張の背景となる個別具体的状況を知ることが前提となるが、「政治としての文化観光」批判においてはやはり批判する際の「切実な根拠」をどこに置くか（誰が何の為に、何故批判するのか）を常に自省する必要があるとは言えるだろう。同時に、文化に関する本質主義的発想とそれへの反論に関する議論状況を踏まえることも必要であるし、「グローバル化とローカル化が会う矛盾状況としての観光の現場」という理解の内実理解も、理論と経験的対象の両面から深める必要がある。また、ポピュラーカルチャーに関してはその政治的意味のみならず、実存的真正性やオーラといった概念との関係も検討せねばなるまい。

## 2.9 真正性

数十年來、観光研究の中心に位置してきた概念の一つである「真正性」の問題に真剣に取り組むには、まずはマッカネル（及びそれ以前のゴッフマンやブーアスティン）の古典的理論や「3つの真正性」の議論、及び最近登場しつつある現象学系の哲学理論と真正性との繋がりを指摘する諸議論をまずは正確に踏まえる必要がある<sup>36</sup>。これが進むべき本筋だとして、先行文献サーベイから浮上する、真正性を巡るその他の興味深い問題を幾つか挙げておこう。

Robinson&Picard(2009)によると、写真は「場所の力」を移動させる力を持ち、「観光写真」は何らかの形で真正性を持ち帰る手段だとされる。こ

れはキリスト教巡礼者が聖地の何かを持ち帰った行動と類比的なものだと言う。いつでもどこでも写真を撮影し流通させる手段を持った現代人にとって、「真正性の持ち帰り」という現象や行為が持つ意味を再検討することは興味深い主題だろう。

Buchmann 他 (2010) はフィルムツーリズムにおける真正性の問題を集団性（ツアー）と関係づけつつ考察しているが、映画ロケ地を訪問する観光者にとっては、訪問する場所それ自体のみならず、ツアーという集団的創造活動や観光者自身の実践が「真正的経験」を構築する重要な一部を為すとされ、「現実と神話との融合」が観光者にとって最も満足を与える経験の契機となると言う。これらの論点については、特に日本の文脈で最近活発に議論される「アニメ聖地巡礼」と言われる現象と突き合わせつつ、単独行動と集団行動における真正性経験の相違や、真正性経験の反復の問題、実写作品とアニメ作品との違いで生じる真正性経験の質の相違などの問題が、興味深いものとして挙げられるだろう<sup>37</sup>。

## 2.10 研究者のポジション

Ali (2012) や神田 (2001) の論考の中には、研究者のポジションや再帰性に関する論点が含まれている。例えば、固定的文脈での立場表明ではなく、流動的に自己を見定めていくポジションとして「旅する理論家」(クリフォードやサイド) という着想が挙げられたり、調査での情報提供者との出会いにおける感情や、この感情が研究者の人生に与える影響そのものが研究過程の中で解明されねばならないと言われたりする<sup>38</sup>。

自分自身をどのように理論の中に描きこむかという問題は古来より哲学者が抱えてきた問いであるとも言え、この問題はとても興味深い。また、理論の背景にどのような感情が働いているか、各種感情がどのような場面で理論形成に影響を与えているかについて問うことも、哲学研究の文脈と観光研究の文脈の両方に跨って探究可能な問いだ

と言えるだろう。哲学者ドゥルーズによれば、我々は哲学者の抽象的で難解な言葉の底に響く、哲学者の「叫び」を聴き取らねばならないのだから。

### 3. 結論に代えて

本稿では「観光」と「哲学」の狭間で理論生産活動を展開するための準備作業として、「観光研究と哲学諸理論」・「観光現象の文脈における根本諸概念」の二つの観点から提起される諸問題を、先行研究を参照しつつ整理してきた。本稿で取り上げたそれぞれの問題について深く掘り下げていくことが次なる課題である。

- 1 “Mobilities”(John Urry, Polity,2007)
- 2 “Neo-Nomadism: A theory of Post-Identitarian Mobility in the Global Age”(Anthony D’Andrea, in *Mobilities*, Vol.1, No.1, 2006, p95-119)
- 3大橋 (2010)『観光の思想と理論』(大橋昭一・文真堂・2010)
- 4Robinson&Picard(2009) : “Moments, Magic and Memories: Photographing Tourists, Tourist Photographs and Making Worlds” (in “The Framed World”, Ashgate Pub Co , p1-37)
- 5Ryan (2010) “Ways of conceptualising the tourist experience: a review of literature” (Chris Ryan, in “Tourist Experience: Contemporary Perspectives”, ed. Richard Sharpley&Philip Stone, Routledge, 2010, p9-20)
- 6 “Surveillance of the worlds of tourism: Foucault and the eye-of-power”(Keith Hollinshead, in “Tourism Management”, 20, 1999, p7-23)
- 7 “Power and Tourism: A Foucauldian Observation”(So-Min Cheong&Marc L. Miller, in “Annals of Tourism Research”, 27(2), 2000, p371-390)
- 8この点については註 4 に示した書籍 “The Framed World” 第 14 章が参考となるはずである。
- 9 “(Hermeneutic) Phenomenology in Tourism studies”(Tomas Pernecky&Tazim Jamal, in “Annals of Tourism Research”, 37(4), 2010, p1055-1075)
- 10 “A phenomenology of tourist experience”, *Sociology*, 13(2), p179-201
- 11例えば Andriotis(2009): “Sacred site experience. A phenomenological Study”, in “Annals of Tourism Research”, 36(1), p64-84、Pernecky(2010): “The being of tourism”, in “The

Journal of Tourism and Peace Research” (1), p1-22、

Pons(2003): “Being-on-holiday: tourist dwelling, bodies and place.” in “Tourist Studies”, 3(1), p47-66 など。

12特にこの問題系の現状把握については、スミス & ロビンソン (2009) : 『文化観光論 (上巻) — 理論と事例研究』(阿曾村邦昭 & 阿曾村智子訳、古今書院・)、 「観光と再帰的モダニティ—観光社会学の試み」(須藤廣・日本観光研究学会第 17 回全国大会論文集・2002)、須藤 (2008) 「観光と再魔術化する世界」(『観光化する社会—観光社会学の理論と応用』須藤廣・ナカニシヤ出版・2008・第 1 章)、Buchmann 他 (2010) : “Experiencing Film Tourism : Authenticity & Fellowship” (in “Annals of Tourism Research”, 37(1), p229-248) などを参考にした。

13例えば「スペクタクル社会」(ドゥボール)、「リクス社会」(ベック)、「個人化社会」(バウマン) など

14例えばエーコのハイパーリアリティ論やボードリヤールの消費社会論・シミュラクル論、ハーヴェイの『ポストモダニティの条件』、ドゥボールの『スペクタクルの社会』の再検討が必要だろう。

15 “Dialectical thinking and critical pedagogy-towards a critical tourism studies”, Peter McLaren & Nathalia E. Jaramillo, in “The Critical turn in Tourism Studies”, Ed. Irena Ateljevic & Nigel Morgan & Annette Pritchard, Routledge, 2012, p7-40

16 “Epistemology, Ontology and Tourism”, Maureen Ayikoru, in “Philosophical issues in Tourism”, ed. John Tribe, Channel view publications, 2009, p62-79

17 “Tourist sights as semiotic signs: A Critical Commentary”, Raymond Lau, in “Annals of Tourism Research”, 38(2011), p711-713、

“Tourism sites as semiotic signs: A Critique”, Knudsen & Rickly-Boyd, in “Annals of Tourism Research”, 39(2012), p1252-1254 を参照のこと。

18 “Authenticity & Aura: A Benjaminian Approach to Tourism”(Jullian M. Rickly-Boyd, in “Annals of Tourism Research”, 39(1), 2012, p269-289)

19 “Ways of conceptualising the tourist experience: a review of literature” (Chris Ryan, in “Tourist Experience: Contemporary Perspectives”, ed. Richard Sharpley & Philip

Stone, Routledge,2010,p9-20) など参照

20 スミス&ロビンソン (2009) 第1章・6章参照

21 “Experiencing Film Tourism : Authenticity & Fellowship” (Anne Buchmann&Kevin Moore&David Fisher, in “Annals of Tourism Research” ,37(1),2010,p229-248)

22 「観光と再魔術化する世界」(『観光化する社会—観光社会学の理論と応用』須藤廣・ナカニシヤ出版・2008・第1章)

23 「感情労働」や「商業化されたホスピタリティ」批判の文脈においても、「批判の根拠」の問題が付きまとうように思われる。

24 Hom-Cary (2004) , “The Tourist Moment” ,in “Annals of Tourism Research” ,31(1),p61-77、その他に “Tourism and the Other” ,in

“Understanding Tourism: A Critical Introduction” ,Hannam&Knox, Sage Publications Ltd ,2010,p106-123、

“Encountering the Other” ,in “Tourist Cultures:identity,place and the traveler” ed.Stephen Wearing& Deborah Stevenson& Tamara Young, Sage Publications Ltd ,2009,p53-71 を参照のこと。

25 神田 (2001) :「観光、空間、文化—観光研究の空間／文化的転回に向けて」(神田孝治・橋爪紳也 & 田中貴子編『ツーリズムの文化研究』所収・京都精華大学創造研究所) p27-70

26 『境界侵犯境界侵犯—その詩学と政治学』(ストリブラス&ホワイト・ありな書房・1995)、『日常実践のポイエティック』(セルトー・国文社・1987)

27 “Mediatized Tourism”, Maria Mansson, in “Annals of Tourism Research” ,38(4),2011,p1634-1652

28 “Good Actions in Tourism” ,Jamal&Menzel, in“Philosophical issues in Tourism”,ed.John Tribe, Channel view publications, 2009,p227-243

29 Salazar(2012) “Tourism Imaginaries: A Conceptual Approach” ,in “Annals of Tourism Research” ,39(2),p863-882

30 Crouch(2004) “Tourist Practices and Performances” ,in “A Companion to Tourism” ,ed. Alan A. Lew, C. Michael Hall, Allan M. Williams, Wiley-Blackwell,2004,p85-95

31 Crouch(2004)が参照する或る文献の執筆陣には狭義のドゥルーズ哲学研究者が多く名を連ねている。“Becomings:Explorations in Time,Memory and Futures” ,E.Grosz ed.,Cornell University

Press,1999)

32 現代的社会現象としての観光を探究する流れとは少しずつれるが、歴史的関心に多少重心を置くなれば、哲学者・思想家・文学者・芸術家などの創造活動・思索活動に対し身体的移動を伴う旅・観光といった事柄がいかに影響を及ぼしたかという点を、幾人かの事例を対象としつつ検討する作業も興味深い。(関連する研究として『旅するニーチェ リゾートの哲学』[岡村民夫・白水社・2004]などが挙げられよう。)

33 Gretzel ほか (2011) “Narrating travel experiences: the role of new media”,Gretzel&Fesenmaier&Lee&Tussyadiab, in “Tourist Experience: Contemporary Perspectives”,ed. Richard Sharpley&Philip Stone, Routledge,2010,p171-182

34 スミス&ロビンソン (2009) 第1章・第6章、神田 (2001)、“Whose culture?”(in “Tourism in Global Society: Place, Culture, Consumption”,Kevin Meethan, Palgrave Macmillan,2001,p114-137)を参照

35 「文化観光におけるポピュラーカルチャーに関する考察」(権赫燐・日本観光研究学会第23回学術論文集・2008)

36 そもそも「人にはバックスペース(事物の生産過程)を見たいという欲望がある」という認識に、ゴッフマンがいかに到達したのかという問題や、マッカネルによる「革命」(「演出」による観光資源の美的改善)という表現の意義や価値をどれほどのものと見積もるべきかという問題など、古典理論の再検討には興味深い問題が含まれる。

37 更に、いわゆる「文学散歩」の類の実践をこれらの問題系との関連でどう位置づけるかという問題もある。

38 Ali(2012): “Researcher reflexivity in tourismstudies research-Dynamical dances with emotions” (in“The Critical turn in Tourism Studies”,Ed. Irena Ateljevic&Nigel Morgan&Annette Pritchard, Routledge,p13-26